

# みやもとだより

第21号 平成29年11月発行

季節のおまつり

## 若宮おん祭

「祭り仕舞いはおん祭」と言われるよう、春日大社の摂社である若宮神社の例大祭は、吉都・奈良の師走を締めくくるに相応しい古式ゆかしい祭礼である。

この祭の起源は、平安時代にさかのぼる。保延二年（一一三六年）に時の関白藤原忠通が、飢饉疫病や洪水が相次いだことから、天下泰平、五穀豊穣、万民和楽を祈つて始めたもので、以

来途切れることなく毎年行われている。

祭りは十二月十七日午前零時、若宮本殿からお旅所への遷幸の儀で始まり、若宮の御神体



小鼓を打ち舞う細男

を囲んだ神官たちが御火の先導でお旅所へ向かう。淨闇の中での神事は神秘の世界を思われる。続いて、お旅所での暁祭の後、同日昼十二時より、若宮に芸能を奉納する集団が参列するお渡り式が始まる。平安・鎌倉時代を彷彿させる華やかな行事で、猿樂や田楽などの楽人たちが春日大社に向かって大鳥居をくぐり参道南側の影向の松の下で、それぞれの芸の一部を奉納する。能楽堂の鏡板に松が描かれているのはこれに由来する。

そして午後二時半よりお旅所祭が始まる。御仮殿へお遷りになられた若宮の御前の芝居という言葉の語源とも言われる芝舞台の上で、厳肅な祭典が斎行される。巫女による社伝神楽に始まり、やがて舞台周囲に篝火が入ると東国の風俗舞である「東遊」、中世盛んであった「田楽」などが順次奉納される。なかでも、「細男」は白い淨衣を着けた六人の舞人が白い布を目の下に垂らし、小鼓を素手で打つ我が国芸能史上類の無いものである。最後はシルクロードを通じて伝えられた舞楽の舞いと管弦の奉納で、鼉太鼓の音は夜更けまで春日野に響き渡る。

（写真・文 宮本卯之助）



芝舞台上の田楽の祭典 後方に舞楽の鼉太鼓

この国の佳き伝統とともに  
宮本卯之助

# 酉の市



スラリと並ぶ縁起物の熊手

毎年十一月の酉の日には浅草千束にある鷺神社はじめ関東の各所で「酉の市」（お酉さま）が立ちます。来る年の開運招福、商売繁盛を願うお祭りで、境内では豪華な飾り物に仕立てた縁起物の熊手を売る屋台がびっしりと立ち並び、熊手の売手と買い手との間で景気良い掛け声や値段の交渉も楽しみです。商談が成立すると威勢よく三本手締めが行なわれます。熊手は前の年より大きい物を買うのが習わしといわれ、運を求める人々で大変賑わいます。



打ち鍛えて作る手打ち鉦

江戸時代、鷺神社のある辺りは浅草寺の裏手で浅草田圃と呼ばれ、豊かな水田地帯で多くの農家がありました。鷺神社では秋に稻の収穫祭が行なわれ、酉の日に農具を売る市が立ちました。熊手もその一つで物を掃き集めるのに必要な農具でしたが、江戸の中頃になると商人たちが、熊手はお金や幸

## 太鼓鉦

太鼓むかしばなし

運をかき寄せるに通じるとして、熊手に金銀で装飾した米俵、千両箱やおかめ、七福神などを取り付け縁起物として売られるようになりました。

十一月の最初の酉の日を「一の酉」、次が「二の酉」、三回ある時は「三の酉」といい火事が多いといわれますが、酉は鶏のことも指し、火のよう赤い鶏冠に由来しているという説もあります。今年は三の酉まであり、熊手がこれから的一年運を搔きこんでくれると願い、大きな熊手を手にする人々を見るのも、この時期の風物詩となっています。

酉の市は、江戸時代のものと思われる鉦がついた古い太鼓を修理することもあり、日本の鉦職人の高い技術力が伺えます。

真鍮、銅で、最近では機械で作られた鉦が使用されることが多いですが、神社仏閣用や高い音を出す御囃子用の太鼓には機械鉦に比べてより耐久性に優れた鉄鉦となるよう真っ赤に焼いた鉄を打ち鍛えて作る手打ちの鉦を使用します。

弊社では、江戸時代のものと思われる鉦がついた古い太鼓を修理することもあり、日本の鉦職人の高い技術力が伺えます。

## 古典芸能へのとびら 寄席囃子

古典芸能へのとびら

太鼓により一層引き締まつた印象を持つたせる黒塗りの鉦は、均一にぐるりと太鼓に打ちこれます。太鼓に使用されると威勢よく三本手締めが行なわれます。熊手は前の年より大きい物を買うのが習わしといわれ、運を求める人々で大変賑わいます。

江戸時代、鷺神社のある辺りは浅草寺の裏手で浅草田圃と呼ばれ、豊かな水田地帯で多くの農家がありました。鷺神社では秋に稻の収穫祭が行なわれ、酉の日に農具を売る市が立ちました。熊手もその一つで物を掃き集めるのに必要な農具でしたが、江戸の中頃になると商人たちが、熊手はお金や幸になる」と商人たちが、熊手はお金や幸

月が経つ頃、まだ普通の生活がままならない東京から出て初めの訪問先が春日大社でした。祭も芸能も自肃ムードの中、不思議なご縁で呼び寄せられるよう訪れたのが、その故郷とも言える奈良でした。爾来、毎月のように通つて多くの学びと知己を得て、今では私には特別な土地となりました。なぜ人々は祭りを伝え、芸能を伝えてきたのか。その原初の姿が奈良には今でも息づき、その心を教えてくれます。「オオー」と百人近い参列者が警蹕を唱えながら暗闇を進む遷幸の儀。見上げた木立の隙間に見えるこの夜空を、千年以上前の先人達も見てきたのかと思うと、この地の重ねてきた歴史に圧倒されます。伝えられてきた形の持つ意味。その意味を伝える事で、時を超えて祭も芸能も生き続けるのだと思います。

代表取締役社長  
宮本芳彦

発行	株式会社宮本卯之助商店
企画広報室	〒111-1035 東京都台東区西浅草二丁目 電話 (03)3384-1244
	www.miyanoto-unosuke.co.jp